

開館40周年・子規没後120年祭

第67回特別企画展

子規、俳句革新の道

令和3年

8月7日(土)～9月20日(月・祝)

休館日 8月10日、17日、24日、31日、9月7日、14日(いずれも火曜日)

開館時間 午前9時～午後6時(展示室入場は午後5時30分まで)

会場 松山市立子規記念博物館 3階特別展示室

観覧料 個人400円 団体320円 65歳以上200円 小中高校生無料

《記念講演》

演題：「明治宗匠と子規派の差異について
－江戸俳諧と「写生」の特徴を作品から探る－」
講師：青木亮人氏(愛媛大学教育学部准教授)
日時：8月22日(日) 午後2時～3時30分
会場：4階講堂 ※入場無料

《ギャラリートーク》

日時：8月15日(日)、29日(日)
ともに午前10時30分から50分程度
会場：3階特別展示室
※聴講には観覧券が必要

《学芸員による関連講座》

演題：「子規門人は子規の俳論をどう読んだか－当館所蔵書簡から－」
日時：9月12日(日) 午前10時30分～12時
会場：1階視聴覚室 ※入場無料

※記念講演・ギャラリートーク・関連講座は、新型コロナウイルス感染症の状況により、中止もしくは入場制限等、開催方法の変更を行う場合があります。

松山市立子規記念博物館

Tel 089-931-5566 〒790-0857 松山市道後公園 1-30

<http://sikihaku.lesp.co.jp/>

子規、俳句革新の道

明治の俳壇は、句作に対する考え方や作風から、「旧派」「新派」と称されるグループに分かれていました。旧派を率いたのは穂積永機や三森幹雄ら「宗匠」と呼ばれた大家たちで、彼らは芭蕉を俳諧の始祖として仰ぎながら、江戸後期から連綿と続く伝統的な俳壇に君臨し、結社を主宰して多くの人々を指導しました。一方、旧派に対抗して新しい俳句を探索したのが新派で、その急先鋒が子規と仲間たち「日本派」でした。また新派にはこの他に、小説家の尾崎紅葉を中心とする「秋声会」や、帝国大学の学生らが結成した「筑波会」などのグループがありました。子規の俳句革新は、旧派宗匠にたたかいを挑む一方、他の新派グループとも競い合う中で展開していきます。

故郷松山の旧派宗匠、大原其戒の門下から出発した子規は、やがて俳句分類の作業を通じて独自の俳句を探索します。明治二十五年、子規は初期の俳論「癩祭書屋俳話」を発表し、続く明治二十八年の「俳諧大要」によって俳句革新の基礎を完成させました。この「俳諧大要」は、初心者向けの入門書として書かれ、実際に見たままを詠む「写実」を提唱し、俳句革新の書として現在も高く評価されています。また、子規は旧派宗匠の句を「月並」であると強く批判し、芭蕉を再評価するとともに新たに蕪村を発見します。こうして新派の中でも他の追随を許さない活動を展開した日本派の俳句は、新聞『日本』や俳誌『ホトトギス』を拠点に、子規の故郷松山の松風会をはじめ、東北や北陸、京阪神など各地方へ浸透していきました。

今回の特別企画展では、子規記念博物館の開館四十周年を記念し、子規が誰とたたかい、何を革新し、他の追随を許さない日本派の俳句をどのように作り上げていったのかを物語る資料を展示し、子規の俳句革新の意義を新たな視点から問い直します。



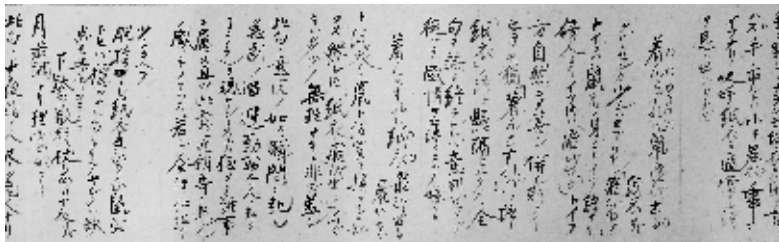
子規の俳論書『俳諧大要』



日本派の選句集『新俳句』



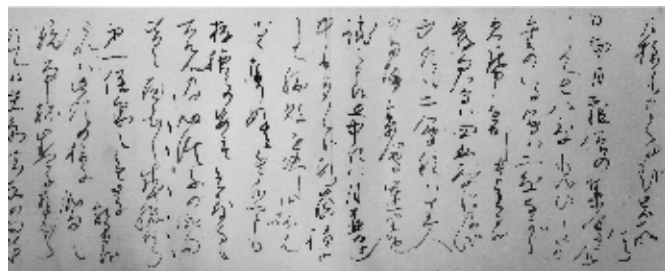
下村為山画「俳句革新記念子規庵句会写生図」



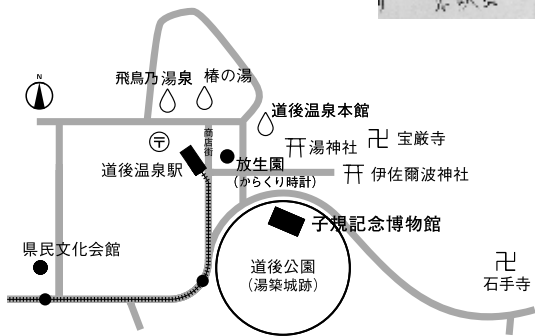
子規句評



『俳諧明倫雑誌』第1編



子規の河東碧梧桐あて書簡 明治26年1月31日 (愛媛県美術館所蔵)



道後温泉駅より徒歩約5分 / 道後公園駅より徒歩約5分 ※公共の交通機関をなるべくご利用ください